

入来牧場におけるイタリアンライグラス数品種の栽培試験

花 田 博 之

(農学部附属農場)

はじめに

入来牧場には100ha以上の草地があり、繁殖牛約150頭が飼養され、常時放牧されている。放牧地の牧草の生産量は不足するために、採草地において夏作はシロビエ、冬作はイタリアンライグラスを栽培しロールペールを調製し冬季用の貯蔵飼料としている。また、冬季にはイタリアンライグラス採草地に時間放牧を行い、自給粗飼料の不足を補っている。

放牧地のイタリアンライグラスの生育状態によって粗飼料の購入量が大きく左右される。したがって、入来牧場での粗飼料の生産量を増加させることが、生産費の節約につながる。そこで、本試験においては、イタリアンライグラス数品種の生育適性を見出し、冬季における粗飼料生産量増加の可能性を検討することを目的とした。

試験方法

冬作のイタリアンライグラス4品種のハナミワセ、ドライアン、エース、テトリライトを1区画4×4mの試験圃場において3反復で栽培した。施肥量は基肥で鶏糞0.5t、追肥に鶏糞0.5t/10a、播種は平成13年9月11日、各品種とも3g/m²の散播を行った。発芽日数、草高、乾物収量を調査した。1回目の収量調査は平成13年11月6日、2回目は平成14年1月11日に行った。

結果および考察

発芽までの日数は4品種とも5日前後で大きな差はなく良好であった(図2)。草高は、15日目、30日目および40日目において品種間の差は認められず、発育も良好であった。30日目から40日目は発育が停滞する傾向が見られた(第3図)。乾物収量は一番草ではテトリライトが最も多かったが、二番草の収量を含めるとテトリライトとハナミワセの収量がほぼ同じになった。二番草においてはハナミワセの生産量が他の品種と比べ多く、冬季に気温が低くてもよく生育し、冬季放牧に適していると考えられた(第4図)。

以上のように、テトリライトは秋季に生育が良かったが、ハナミワセは冬季に生育がよかった。したがって、入来牧場で冬季放牧を行い粗飼料の自給率向上に役立てるには、ハナミワセが最適であると考えられた。しかし、今後の生育状況も考慮に入れて、一年を通じた生産性を検討する必要があると思われる。

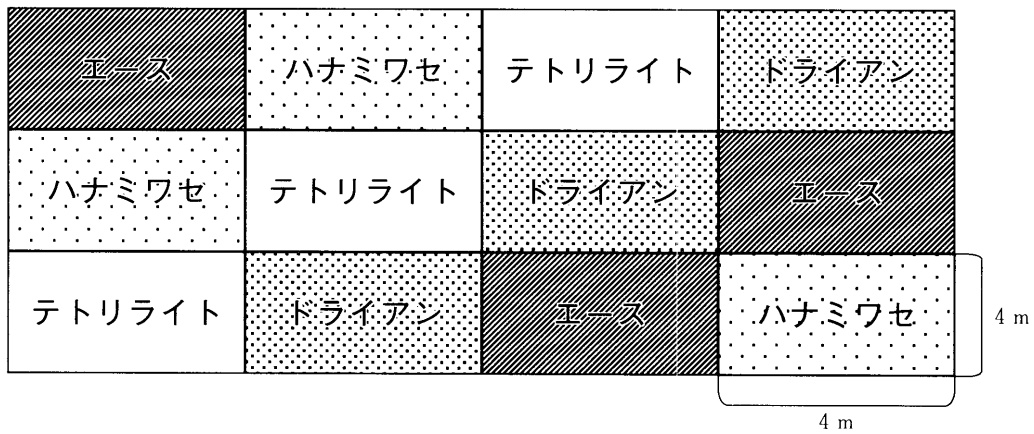


図1・品種ごとの試験圃場の配置

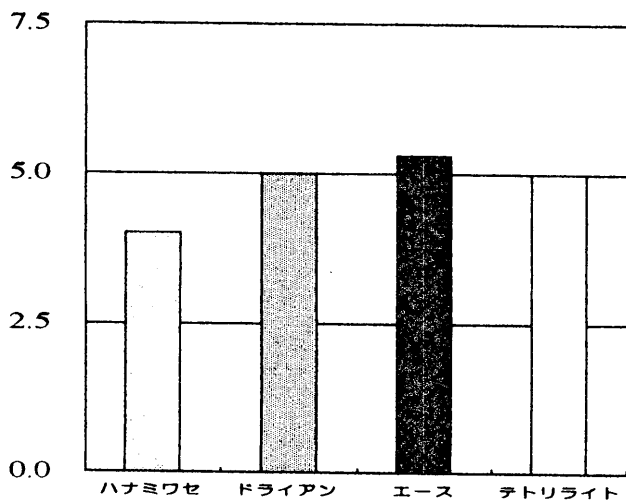


図2. 発芽までの日数

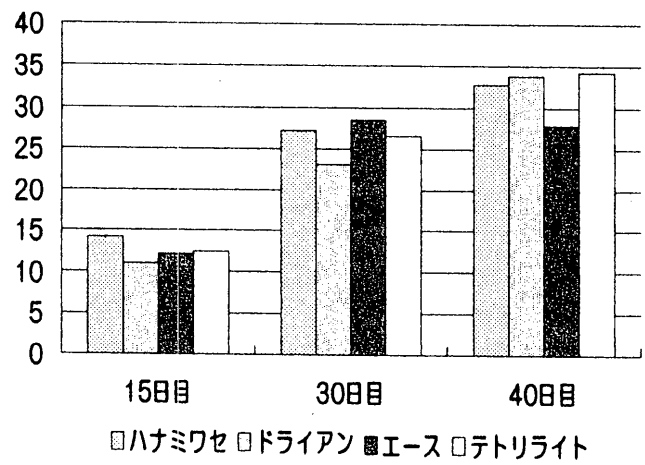


図3. 草高の推移 (cm)

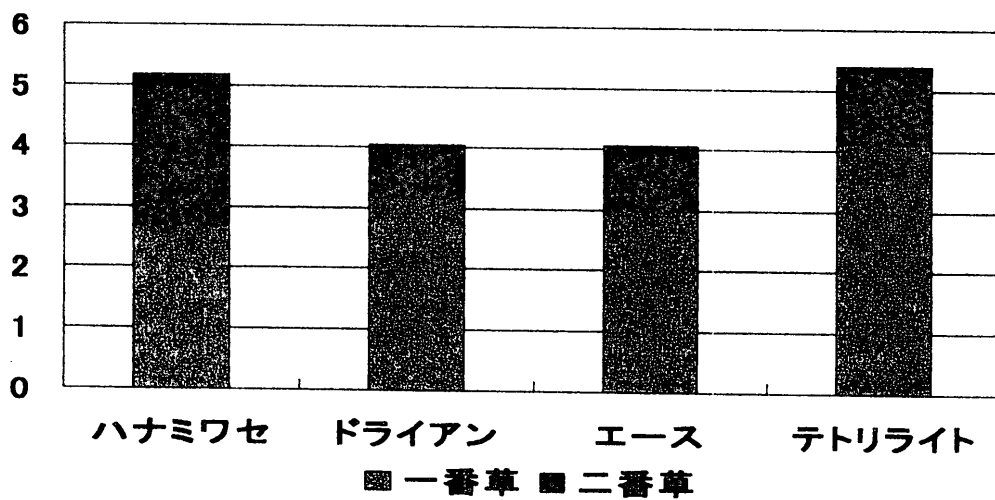


図4. 二番草までの乾物収量 (トン/ha)